

聖書：ピリピ 1：27～30

説教題：福音の信仰のための共闘

日時：2016年12月4日（朝拝）

パウロは自分のことを心配してくれているピリピ教会に近況を1章12節から26節までの部分で伝えました。パウロは牢屋の中で失意の中にあるのではないか？そんな心配をしていてくれたかもしれないピリピ人たちに、パウロは全くそうではない！と語りました。この状況でかえって福音が宣べ伝えられていることを私は心から喜んでいる！と言いました。そして私の切なる祈りと願いは、生きるにも死ぬにも私の身によってキリストがあがめられることだ！と言いました。特に21節には「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。」というパウロの有名な告白が記されました。

それに続く今日の箇所からは、ピリピ人たちに対する勧めが語られます。パウロは再びピリピ人たちのところへ行けるであろうという見込みあるいは期待について述べましたが、それがどうなろうと、あなたがたはこのことに取り組んでくださいと言います。それが27節の「キリストの福音にふさわしく生活しなさい」ということです。この「生活する」という部分には印がついていて、欄外の27を見ると、別訳として「御国の民の生活をしてください」と記されています。この「生活する」という言葉は「市民生活をする」とか「市民として振る舞う」という意味を持つ言葉です。3章20節に「私たちの国籍は天にあります」という言葉が出て来ますが、そこの「国籍」という言葉と同根の言葉です。これはピリピ人たちにはすぐに理解できた言葉だと考えられます。以前、触れましたように、ピリピはローマの植民都市で、多くの退役軍人が住んでいました。従ってローマから地理的に離れていてもローマ色が強く、ローマ市民であることを誇りとする人々の生き方については皆が良く知るところでした。そんな中、パウロは「市民生活をする」という意味の言葉を使ったのです。これはもちろんローマ市民として、この世の国民として歩め、と言ったものではありません。これは天国の市民としてということでしょう。ですから欄外の別訳のように「御国の民の生活をしてください」という意味になるのです。

ここに二つのメッセージが語られていると言えます。まずその一つは天国の市民としての自覚をしっかりと持つようにということです。先ほど触れた3章20節に「けれども、私たちの国籍は天にあります」と記されています。クリスチャンはこの世に住んでいま

すが、この世に属する人ではないというのが聖書のメッセージです。その国籍は天にある。死んで天に召されたら天に国籍を持つのではなく、今すでに天に国籍を持っている。天国が私の属する第一の国である。そのことを忘れてこの世に同化してしまってはならないということです。聖書で信仰者のこの世での生活は外国生活にたとえられています。自分の国ではないところに一時的に滞在している寄留者、旅人のイメージです。自分の国でない所に住めば、周りの人たちとは考え方や使う言葉、文化やライフスタイルが色々違うでしょう。ある意味で当然です。しかしそこで周りの人と違うことを恥ずかしく思って、自分が属する国についての誇りを捨てるべきでしょうか。決してそうではないでしょう。この世で生活する間も、自分が御国の民であるというアイデンティティーを忘れてはならないということです。

もう一つのメッセージは、自分がどの国に属する者であるかを自覚するとともに、それにふさわしい生活をするということです。すなわちキリストの福音にふさわしく生活しなさいということです。パウロの強調点は、「生活する」という点にあります。私たちは前回、パウロの素晴らしいあかしを聞きました。キリスト教は何と素晴らしい死生観を持っているかを 21 節を中心に味わいました。しかしそれを聞いたということで止まってしまってはならない。あるいはパウロが今どういう状況にあるかを知って終わりにしてはならない。ピリピ人たちにも取り組むべき課題があります。それはパウロがピリピに来て来なくても、天国の市民としての生活をするということです。その生活が福音の拡がりのためには必要です。その時、人々はその中に見るのです。そしてなぜこの人たちはこのように生き、またこのように死ぬのか、を問うようになる。その時に私たちは福音を力強く伝えることができるのです。福音は言葉だけではなく、生活を通して語られて行かなければならないということです。

そうするなら、パウロはどんなニュースを聞くことができるでしょうか。続く箇所を読むと、ピリピ教会はある種の迫害の下にあったことが分かります。28 節に「反対者たち」という言葉が出て来ます。詳しくはどんな人たちだったのか良く分かりませんが、外部から彼らを攻撃する人たちがいたのです。そんな中、御国の民としてしっかり生活するなら、どんな知らせがパウロに聞こえて来ることになるか。まず 27 節に「霊を一つしてしっかり立ち、心を一つにして福音の信仰のために、ともに奮闘しており」とあります。ここに「霊を一つに」「心を一つに」とあります。最初の「霊」とは何でしょうか。学者によって意見は分かれています。有力な一つの見方は、これは「御霊」を

指しているということです。聖書では「一致」の問題が語られるところでは、良く聖霊が出て来ます。エペソ書 4 章 3～4 節：「御霊の一致を熱心に保ちなさい。からだは一つ、御霊は一つです。」 I コリント 12 章 13 節：「一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。」 これらの聖句が示していることは、私たちが互いに努力して一致を作るのではないということです。そうではなく、私たちは御霊によってすでに一致の祝福の中に導き入れられている。この聖霊のみわざが基礎です。そしてそれを大切にすることによって、二つ目の「心を一つにして」というメッセージがあるということです。あるいは別の学者は、この「霊」は人間の「霊」を指しており、「霊を一つにして」と「心を一つにして」を重ねることによって、より一致の大切さを強調していると見ます。いずれにせよ、ここで「一致」が重要な事柄として語られていることは分かります。外側からの攻撃がある中、内部がバラバラだったら立ち行きません。戦いのためには内部の一致が必要です。そのためにすでに与えられている一致を大切に、これを尊んで、共同の戦いにあたるように！とパウロは言っているのです。私たちの信仰生活はただ個人のものではないのです。私たちは神が導き入れてくださった共同体の祝福を感謝しながら、一層互いに心を合わせ、支え合いながら、チームプレーで福音のための戦いをする必要があるのです。

また 28 節には「どんなことがあっても、反対者たちに驚かされることがない」と言われています。迫害活動や反対活動があってもいちいち慌てない。ビクビクしない。むしろそれは当然起きることだと構えて悠然としている。ある人はキリスト教信仰を持てば、あとはバラ色の生活が待っていると期待するかもしれませんが、すべてのクリスチャンが経験するように決してそうはなりません。神を信じたのにどうしてこんなことが起こって来るの？というような苦しみの中に投げ入れられる。しかしイエス様は前もってはっきりとこう語っておられました。ヨハネの福音書 15 章 20 節：「しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。」 良く考えてみれば、この世はイエス様を十字架につけた世です。ですからこの世に住む限り、私たちがイエス様の側に付くという態度を明確にするなら、世から同じ扱いを受けるであろうことは当然予想されることです。ですから驚かない。そしてイエス様はこうも約束してくださっています。ヨハネの福音書 16 章 33 節：「あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」 この世はイエ

ス様を十字架につけ、イエス様に勝ったように見えたのですが、最終的にイエス様が十字架と復活を通して世に打ち勝たれました。そのイエス様によって、私たちも最終的勝利へと導かれるのです。どんな苦しみを受けても必ずそれを乗り越える力に生かされるのです。ですから私たちは怯えたり、驚かされたりすることなく、確信を持って御国の民の生活をするに邁進すれば良いのです。

そうするなら、それは反対者たちにとっては滅びのしるしであり、あなたがたにとっては救いのしるしですとされています。そのクリスチャンたちの生き方には、神がその背後におられるということが示されています。ですからそのクリスチャンたちに反対し続ける人々に対して、その姿は「あなたがたは神に敵対しているのであって、そのままでは滅びに至りますよ」というしるしになる。一方、クリスチャンたちが苦しみを受けても神の力に守られてしっかり立っているなら、それは救いの正道をしっかり進んでいるしるしになる。パウロはその後に「これは神から出たことです」と付け加えることにより、これら一切は神のご計画と最善の知恵によって導かれていることを述べています。決してハプニングではないのです。だからどんな中でも慌てず、人に驚かされず、神に信頼して、この救いの道を歩め！と言っているのです。

こう述べたパウロは、最後の 29～30 節で私たちが心に留めるべき真理を印象的な表現で語っています。29 節：「あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみを賜ったのです。」ここで「賜った」と訳されている言葉はギリシャ語の「恵み」すなわちカリスという言葉から来たものです。つまりパウロはここでキリストのための苦しみを、信仰同様あなたがたに対する神からのプレゼントなのだと言っているのです。「信仰」が神からの良き贈り物であることについては誰も異論がないでしょう。しかし神はそれと一緒に「苦しみ」も特別なギフトとして与えてくださった。私たちはこれを聞いて、「エ～？私は信仰だけでいい。苦しみはノーサンキュー！」と言いたくなります。しかし神が良いものとして与えて下さるのですから、私たちが自分の小さな頭で判断して、こっちはもらいたいが、こっちはいりませんなどとは言うべきではないでしょう。

これはどういうことなのでしょう。先に触れたように、キリストはこの世で苦しめられ、十字架につけられました。ですからそのキリストを信じるなら、キリストを受け入れた私たちにもキリストと一緒に苦しむ生涯が一緒に付いて来ます。しかし私たちは

勘違いしてはなりません。私たちがイエス様と一緒に歩む時、私たちはイエス様の重荷を負わされるのではないのです。イエス様が苦しみの道を歩まれたのは私たちのためです。ですからそのイエス様を信じて行く生活とは、私の身代わりに苦しみを担ってくださったイエス様とともに歩く生活です。イエス様はそこで私たちの重荷をほとんど背負って歩いてくださいましたから、私たちに残されているのは本来からすればずっとずっと軽くされた重荷でしかありません。私たちはそのような道をイエス様と一緒に歩むのです。そしてそこに残されている苦しみをいくらかでも味わうことを通して、私たちはイエス様がどんなに深く私たちを愛してくださったのかを知り始めるのです。パウロはそのことを後に 3 章 10 節からのところで語ります。「私はキリストの苦しみにあずかることも知りたい」と。これはキリストを益々知り、深い交わりへと導かれる歩みなのです。新約聖書に記されている使徒時代の教会もそうでした。使徒の働き 5 章で、迫害され、むちで打たれた時、使徒たちはどんな反応を示したでしょうか。5 章 41 節：「そこで、使徒たちは、御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら、議会から出て行った。」これはまさにキリストのための苦しみを特別なギフトとして、恵みとして、プレゼントとして受け取ったということです。

そしてパウロは最後の 30 節で「あなたがたは、私について先に見たこと、また、私についていま聞いているのと同じ戦いを経験しているのです。」と言います。「先に見たこと」とはパウロがピリピにいた時にピリピ人たちが見たこと、すなわち使徒の働き 16 章に記されている牢屋の出来事のことなどでしょう。また「いま聞いていること」とは、この手紙を通して知るローマの投獄のことでしょう。ピリピ人たちの戦いも本質的にこのパウロの戦いと同一なのです。キリストにある者たちの共通の戦い、共同の戦いなのです。これは栄えある御国の民であることのトレードマークのようなものなのです。

以上の箇所から私たちは何を学ぶでしょうか。私たちはまず自分が天に国籍を持つ天国の市民であるという自覚をしっかりと持つべきであることを教えられます。そのことを忘れてこの世の人々に同化してしまってはならない。自分はどこに属する者なのか、その誇りを持って天国市民としてのあかしの生活を置かれている場所です。その励ましを受けます。その際、「一致」を大切にしていなければならないことも教えられます。私たちの信仰生活は個人プレー、個人主義のものではありません。それは共同の戦いです。御霊による一致が与えられていることを感謝し、これを大切にしながら、互いに支え合い、共に奮闘する。そしてもう一つ、キリストに従う生活において苦しみがあるの

は当然ということです。これは信仰とセットになっている神からの祝福のプレゼントです。そのことを覚えて驚かず、慌てず、「福音の信仰のための共闘」にこの身をささげて行きたい。御国の民としてのアイデンティティーを常にしっかり持ち、だからと言って高ぶらず、キリストの福音に聞き従い、反対者たちに復讐するのではなく神に信頼して、御名があがめられるための生活をささげることができるように、その生活を通して人々に福音を宣べ伝えて、御国の祝福へ招くために用いられる天国人の市民生活へ進みたいと思います。